

「センパイ」大平さん

エドウィン・O・ライシャワー

親友というものは若い時でなければなかなかできないのが普通ですが、大平正芳さんと私の場合は、初対面がお互いに五十の坂を越してからだったにもかかわらず、お互いに親近感、信頼感、そしてこれは私の方だけだったかも知れませんが、敬愛の念すら抱くようになりました。私が駐日大使として赴任したのは一九六一年のことですが、それまでに日本の著名な政治家の方々のお近づきを得たことはありませんでした。当時池田内閣の官房長官をされていた大平さんのことを、私は、当初、池田首相の背後につらなる人物のひとりとしが受けとめておりませんでした。しかし一九六二年から二年間にわたり外務大臣をされ、それを機にお互いの接触はぐんと緊密になって、私たちの友情も深まっていきました。

大平さんは素朴でけれん味のない人柄で、それだけに多くの人から信頼を寄せられていました。公のことになると、慎重に発言を控えられることが多かったのですが、いつも裏表のまったくない、率直な方でしたから、大平さんのおっしゃることには私は全幅の信頼を置いていました。大平さんはすぐれたユーモアのセンスの持主でもありました。親しくお付き合いするようになって、当初はほとんど英語を話されることのなかった大平さんが「それでも若い時は英語の教師をしたことがあるんですよ」と言って、何々大笑されたのを私は今でもよく憶えています。共に同じ一九一〇年の生まれであることが私たちの友情の絆を強めることにもなったようです。私が十月生まれで、大平さんが三月だから、大平さんの方が「センパイ」だというふうな冗談を飛ばしたものでした。

一九一〇年という年はワインのできについてはともかく、男のできは良かったわけだ、ということについてもふたりの意見は一致したものです。大平さんとの交友は、家内のハルも大平夫人と親しく往き来するようになり、一段と深くまりました。大平夫人も、大平さん同様、率直で、飾り気のない、親しみのもてる人柄です。これで私たちは本当の意味での夫婦ぐるみのお付合いをするようになりました。このような交際は日本人夫婦と外国人夫婦の間では、いや、日本人同士の間でさえ、稀なことです。一九六四年に私が精神異常の青年に刺された直後、大平さんは病院に駆けつけてこられ、私が手術を受けていた三時間もの間、家内のそばにつき添って下さったときのことを、家内は今も深く感謝しております。

大平さんは常に泰然自若としておられました。少なくとも表面上は。私と一緒にホワイトハウスに赴いて、ケネディ大統領との会見を待っている間、大平さんがコックリコックリされていた姿が目には浮びます。しかし大平さんについてもっとも強く印象に残っているのは、何といても、日米の友好対等関係を築き上げるために傾けられた大平さんの熱意とたゆむことのない努力です。一九六〇年代の政治情勢は今日とは全く異っていて、日米関係も現在はずっとデリケートで、極度の緊張状態にありました。

大平さんの対米外交手腕がいかなるものであったかは次の一例によっても明らかでしょう。アメリカは、日本に対して小麦輸入を増やすことよってアメリカの国際収支の改善に協力するよう望んでいました。アメリカ大使館の公邸でお会いし、私はこの事情を大平さんに説明したところ、大平さんは、「わかりました。だが、このことは誰にも言わないで下さい」とひとこと口に出されただけでした。それで私はこの件については沈黙を守っていたのですが、いくばくもなくして、世論を無用に刺激することなく、問題は無事に解決してしまいました。このとき、私は大平さんがいかに遠謀深慮で政治手腕に長けているかを知り、必ずやいつの日か首相になられる

に違いないとの確信を得ました。

大使を退いたあと、大平さんとお会いする機会は少なくなりましたが、来日するたびに私は大平さんを執務室に訪ね、大平さんも私たち夫婦を夕食に呼んで下さったものです。いつも日米関係について私は単刀直入に話しておりましたし、大平さんも同じように腹藏のない意見を述べられ、つっこんだ質問をされるのでした。

一九七九年、首相としてワシントンを訪ねられたとき、私は求められるまま、アメリカ政府の迎賓館であるブレア・ハウスに赴いて、楽しいひとときを過ごさせていただきました。モンテール前副大統領の夫人は私のいとこに当たりますので、私は大平さんのことを手紙に書いて彼に送り、内容をカーター大統領に伝えてくれるよう頼んでおきました。大平さんは終始一貫してアメリカの有力で信頼すべき友人であったことを強調しておいたのです。カーター大統領はこの手紙のことを大平さんに話されたものと見えて、後で大平さんからは、大統領にとってもよく「紹介」して下さってまことにありがたいと、大変鄭重な感謝をいただきました。その夜、大平さんを迎えて催されたホワイトハウスの晩餐会で、大平さんの英語が、私が初めてお会いしたころから見ると、大変上達されていることを知り、非常に驚かされました。

大平さんが、亡くなられる少し前、私のために催されたレセプションにわざわざ出席して下さい、寡黙の人という評判に似合わず、大変雄弁で機智に富んだスピーチをされたことは楽しい思い出となっています。私は、一九八〇年五月に二人で撮った写真を最も大切な宝として大事にしております。この写真の温顔には、大平さんの篤実な人柄とユーモアがあふれていると同時に、大平さんを偉大な人物たらしめた、筋をまげない剛直さを窺わせるものがあります。私は、大平さんが日本の最もすぐれた首相のひとりであり、急逝さえされなければ、長期にわたり政権を担当されることになったであろう、と確信しております。

(元駐日アメリカ大使)